

あふれる緑に囲まれた

円山陸上競技場

北海道を代表する陸上競技場として、数々の大会が開かれ、熱戦が展開されてきた円山陸上競技場を紹介します。

市民の念願であった陸上競技場が円山に完成したのは、昭和昭和九年八月のことです。札幌総合運動場として、陸上競技場のほかに野球場や庭球場も一緒に造られました。陸上競技場は、走路幅十呎、一周四百呎のトラック、観客の収容人員三万人（現在は一万二千人）と、本格的なものでした。緑の中にある競技場は、多くの出場者の絶賛を集めました。グラウンド開きは、次の年の七月十四日に行われ、元札幌陸上競技協会会長のかわさき川崎せい静いちろう一郎さんが神宮大会青年団競技の札幌地区予選二百呎に出場し、優勝しています。

二十九年八月の秋季国体に備え、前年にはメーンスタンドが造られました。その国体で北海道は、天皇杯三位という好成績を残しています。

陸上競技場は、夏だけではなく、冬期間もスケートリンクとして使われており、二十九年一月には東洋で初めて、男子のスピードスケート世界選手権札幌大会が開かれました。

このように数々の大会が開かれた円山競技場。平成八年七月下旬から四回目の大きな改修工事が始まり、トラックの改修やメーンスタンドの増設などが行われました。

た。改修前の七月十四日には、なんぶ南部ちゆうへい忠平記念陸上競技大会がアトラクタオリンピックの壮行競技会を兼ねて開かれています。（平成八年七月号・

第三十二回）



昭和10年ころの陸上競技場
(札幌市教育委員会文化資料室所蔵)